足立区教育委員会指導力向上中核校

渕江小学校　外国語活動・ 外国語科研究通信

第１号
令和６年６月

今年度第１回目となる外国語活動の研究授業を 兵藤 魁 教諭が行いました。協議会では、「個別最適な学びにつなげる ICT 機器の活用」や「めあての意味と授業での役割」について意見交流を行いました。指導・講評では、関西外国語大学 英語キャリア学部 英語キャリア学科教授 直山 木綿子先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成
～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：4年2組 担任 兵藤 魁教諭
単元名：Unit 2　Let's play cards.
指導講評：関西外国語大学 英語キャリア学部 英語キャリア学科教授 直山 木綿子先生より

〈研究経過報告〉

最終活動：「新しく渕江小学校に来た先生と仲良くなるために、遊びに誘おう。」

最終活動の設定により、児童の意欲を引き出すこと、この単元を行う必然性をもたせることができる。最終活動を達成するために、毎時間児童と一緒にめあてを立て、学習を進めていく。

研究主題をもとに、以下3つの視点を中心に授業を行った。

① 個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実

今までは、協働的な学びとして中間指導を活用しクラス全体で疑問を解決してきた。今年度は、個別最適な学びを実現するために、中間指導の時間に一人一台端末を活用していく。しかし、児童はこれまでタブレットを使って自分の言いたいことを調べることをしてこなかった。そのため本単元では、まずタブレット端末を使って調べることができるように活用していく。そして、今年度１年間を通して、タブレット端末が個別最適な学びの一つのツールとして児童の中で選択肢の一つになっていくようにしていく。

② 表現を繰り返し使うための工夫

クイズを出したり、教師のやり取りを見せたりする中で、自然に新出単語や、表現と出会うようにしている。教師の後に続いて同じことを繰り返し言うのではなく、教師と児童、児童同士で何度もやり取りする中で、自然と何回も繰り返し言うことができるような授業展開にしている。そこから児童同士がやり取りする中で、分からなかったことを学級全体で共有・解決し、児童が自信をもって自分の思いや考えを伝え合えるようにする。

③ 効果的な中間指導

4年生は、3年生での既習事項があるとはいえ、それは「自分の言いたいことを相手に伝える」という内容が多かった。本単元では、自分の好きな遊びを相手に伝えつつ、相手の返答によって伝えたい内容が変わってくる。そのため、相手の返答が「Yes」か「No」かによってどう言えばいいのかという疑問が多く出てくると考える。１時間目で多くの遊びの英語表現を確認した後、天気や誘い方などの新しい表現に出会い、やり取りを行えるような構成にする。そのたびに中間指導で自分が言いたいこと、友達が言っていることを聞いたり言ったりしながら新出表現を自然に繰り返し使っていけるようにしたい。

〈授業者自評〉

本校勤務4年目になり、中核校の一員として、研究の基礎的な部分(最終活動を工夫し、学習活動に必然性を生み出すことや中間指導を中心とした言語活動の充実)を広めるとともに、新しい視点として「個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実」を目指して ICT 機器を活用しながら授業を組み立てた。

本単元を指導してみて、「Let's」の表現を引き出し、動詞の使い分けをさせたり、活用語彙を増やしたりすることに難しさを感じた。ICT機器を使い、自分の表現したい語彙を習得する手助けになるよう工夫した。初めての試みだったこともあり、活用方法に課題が残ったため、今後1年間で確立していきたい。

〈研究協議会〉

協議テーマ１　授業冒頭、中間指導での最終活動・めあての活用について

◎「①前時までの学習内容の確認」「②最終活動の確認」「③児童とのめあて作成」の流れで授業を始めることで、児童が目的意識をもって授業に取り組むことができていた。

◎中間指導の際、「今日のめあては何だった？」と問いかけると、児童が「遊びに誘うこと」と答えていた。中間指導でめあてに立ち戻らせることで、その後の言語活動で本時の目標を意識して取り組む契機になっていた。

◎中間指導で、児童の「言えなかったこと」を共有して、丁寧に表現の獲得をさせていた。

●中間指導での１人の子にかける時間が多かった。質問者以外にも表現を言わせるなど、アウトプットをもっと取り入れるとよいのではないか。

→兵藤先生

児童のやりとりの時間を3回、中間指導を2回とった。かなりの時間を言語活動に充てている。それにより、「Let's」を使った表現が定着している児童が多く見受けられた。

協議テーマ２　個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実について

◎言語活動を通して、自ら課題を見つけさせ、解決のための手立てを引き出していてよかった。

◎Google スライドを使って、音声を聞くことができることで、児童自らが必要としている表現を習得することができていた。

●ただ音を聞くだけになっていて、発音を練習している児童が少なかった。活用の仕方を工夫する必要がある。

→兵藤先生

今回、「個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実」を実現する単元を計画し、ICT機器を使うことを選択したが、難しさを感じた。今回の授業は、5月段階での活用実践として考えてほしい。今後、使い方に慣れた児童が、タブレットで音声を聞き練習したり、ALTや担任に聞いたり、教科書を振り返ったりと、自分の学習方法を選択して課題解決していけるように指導していく。

〈指導・講評：関西外国語大学　英語キャリア学部　英語キャリア学科教授　直山　木綿子先生〉

外国語科と外国語活動の違い

・週に授業が1回のみの外国語活動と2回行う外国語科では、児童の身につく速度の差が歴然である。1つの授業に児童の言語活動の時間をきちんと設定し、英語に触れさせることが重要。

→特に、授業冒頭に Small Talk を行い、自由度の高い英語での会話をさせることで、アウトプットの機会を担保していきたい。

・今回の授業では、言語活動を多く取り入れ、最後のやりとりでは「自信をもって英語表現を使っている児童」が多かった。そういった言語活動を中心に組み立てられる授業は、確実に児童に英語が身についていく。

言語材料の精選

・"I like drawing pictures."と言った児童は、"Let's draw!"と誘うことになる。動名詞→原型の変換が必要なため、難易度が高い。

→授業内で英語に慣れている児童が、"Let's try!"と言っていた。「try」という言葉は非常に柔軟で、感心した。そういった児童の発言を見つけたら、共有していけるとよい。

4年生の段階から、動詞の使い分けで児童が混乱するくらいなら、易しい表現を使わせて言語活動をスムーズに進められるとよい。

・担任と ALT との会話の中で、Let's play ～.を使っていたり、Let's do ～.など、動詞が混在してしまっていたりしたため、児童にとっては混乱する要因になっていた。

・タブレットの活用についても、言語材料を複雑にせず、簡易化し、児童が「活用することで身に付く」と感じさせることが重要である。

ALT の活用

・ALT が自分の役割をきちんと把握していないことがある。児童がやりとりをしていたら、聞いたり、質問をしたりして、関わってほしいが、全員がそうできるとも限らないのが現状。

→教員が行ってほしいことを明確に指示し、役割を理解させることで児童の学習効果はより高まる。

・中間指導でも、ALT が難しい表現を使ってしまうケースがある。今回、兵藤先生が簡単な表現に言い換えたりしていたように、教員側が配慮する必要もあるだろう。